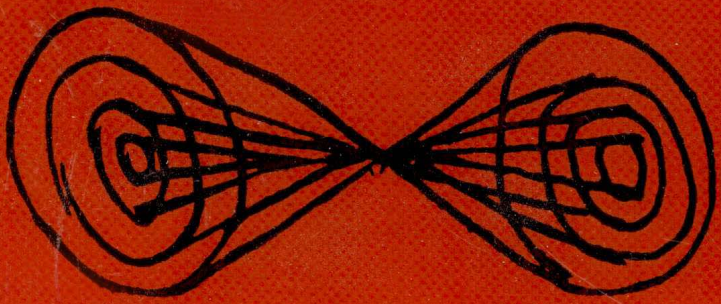


日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

モンテスキュー　ペルシャ人の手紙

ヴォルテール　カンディド

ディドロ　運命論者ジャックとその主人　短編

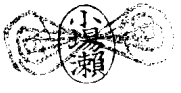
根岸国孝・丸山熊雄・新倉俊一
小場瀬卓三　訳

世界文學大系

16

世界文学大系 16

モンテスキュー
ヴォルテール
ディドロ



昭和35年3月15日発行

定価500円

訳者代表　小場瀬卓三

発行者　古田晁

印刷者　多田基

発行所　株式会社 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 4123　電話 (291) 局 7651

目次

モンテスキュー　根岸国孝訳
ペルシャ人の手紙　5
ヴォルテール　丸山熊雄訳　新倉俊一訳
カンディド　157
ディドロ　小場瀬卓三訳
運命論者ジャックとその主人　219
ある父親と子供たちとの対話　372
ブルボンヌの二人の友　387
これは物語ではない　395
世論の無定見について　409

十八世紀の思想小説　ルル・ブルトン　小場瀬卓三訳　424
解説　小場瀬卓三　439
年譜　445

装幀　庫田　叡

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

モンテスキュー

ペルシャ人の手紙

『ペルシャ人の手紙』についての二、三の省察[1]

『ペルシャ人の手紙』を読んで思わず知らず、そこに一種の小説を発見するということほど人を喜ばせたものはない。話のはじまり、発展、結末がある。いろいろな登場人物は、かれらをつなぎ合わせる連鎖の中におかれてある。この人たちのヨーロッパ滞在が長びくにつれて、世界のこの部分の習俗も、かれらの頭の中で不思議、奇妙と次第に見えなくなり、また、この人たちの性格の相違にしたがって、この奇妙、不思議の感じにも程度の差がでるのである。他方では、アジアの後宮の混乱は、ユスベクの不在に比例して、すなわち、憤激が増加し、愛情が減少するにしたがって、増加する。

次に、この種の小説は通常成功するものである。それは自ら自己の現状を報告するものだからである。そのことが、現状についてのあらゆる話以上に情熱を感ぜしめるのである。『ペルシャ人の手紙』以後に現われた二、三の愉快な作品[2]が成功した原因の一つはここにある。

最後に、普通の小説では、余談というものは、それ自体一個の新しい小説を構成しない限り、許されえない。そこに理屈をはさむことはできないであろう。というのは、登場人物の誰も理屈をこねるために呼び出されているわけではないからである。そんな真似をすれば作品の構想と性格を傷つけるであろう。ところが、手紙の形式では、役者は限られていないし、取り扱われる題目は、あらかじめこしらえたいかなる構想、いかなる筋立てにも依存していないので、作者は哲学・政治・道徳を小説に加えて、その全体を隠された、いうなれば、人に知られぬ鎖でつなぐという利点を得たことになる。

『ペルシャ人の手紙』はたちまちにして驚くべき売行きを示したので、本屋たち[3]は、あらゆる手を使って続刊をえようとした。かれらは人に出会いさえすれば誰彼の見さかいなく、袖を引っ張って、「先生、お願いします、『ペルシャ人の手紙』を手前の店で」といったものである。

だが、すでに申し上げたことで十分解るとおり、この作品にはどんな続刊もありえないし、まして他人の手で書かれた手紙との混合などは、どんなにうまく書かれていようが、ありえないことだ。[4]

描写の中には多くの人たちが大胆すぎると思った箇所があるが、その人たちにお願いすることは、この作品の性質に注意していただきたいということである。ここに重大な役割を演ずることになるペルシャ人たちはいきなりヨーロッパ、すなわち、他の宇宙に移住したのである。それでやむをえずかれらを無知と偏見のかたまりのように描かなければならない時期もあった。すなわち、作者はかれらの観念の生成と発達を示すことにのみ力を入れていたのである。かれらのはじめのうちの考え方は奇妙なものであらざるをえなかった。かれらに機知と相容れうるような種類の奇妙さを与えるよりほかには、作者に方法がないように見うけられた。それでかれらに異常と思われた事物に出会うたびごとに、かれらがうけた感情のほかは描きえなかったのである。作者がわれらの宗教のどれかの原理を傷つけようと思ったどころではなく、夢にも自分を軽はずみを演じる奴だと疑ったことさえない。それらの描写はいつも意外、驚きの感情と結びついているのであって、検討の観念とは結ばれず、まして批判の観念と結びつくものでない。われらの宗教について語るにあたっては、これらのペルシャ人はわれらの風習、慣行について述べる場合以上に予備知識があるように見えてはならなかったのである。そこで、時にはわれらの教義を奇妙だと思う場合があるが、この奇妙さにはこれらの教義とわれらの他の真理とのあいだに存する関連に対する完全な無知の跡が常にうかがわれるのである。

以上の弁明はこれらの真理に対する愛から行

うものであって、人類に対する敬意とは別問題であるが、もちろん人類の急所をたたくつもりもなかった。そこで読者にお願いするが、話にのぼった描写をそう感じるのが当り前な人々の持った意外の感の結果と見なすか、または、逆説などをやれる力もない人たちの行なった逆説と見なすことを片時も忘れないでいただきたい。[5] この作品の面白さの全部が現実の事物とその事物を観察する独特な、素朴な[6]、あるいは、風変りなやり方とのあいだの永遠の対照に存したということに注意していただきたい。いうまでもなく『ペルシャ人の手紙』の性質や構想はまったく包み隠しのないものであって、自分からだまされたいと思う人のほかは、けっしてだますことがないであろう。

(1) この省察は一七五四年版の補遺の中に現われた。
(2) リチャードソンの『パメラ』(一七四一年)とド・グラフィニー夫人の『ペルー人の手紙』を指す。
(3) 初版には、『オランダの本屋たち』となっていた。
(4) 一七四四年版に加えられた、サント・フォアの『トルコ人の手紙』への、当てつけ。
(5) 初版ではこの部分の表現がもっと長くなっている。
(6) Barckhausen は「素朴な」を「新しい」と訂正している。プレイヤード版もそれにしたがっている。

序言

わたしはここに献呈文など書かないし、この本のための保護も求めない。本が良ければ人が読むだろうし、悪ければ、読んでほしいとも思わない。

これらの手紙は公衆の趣向をしらべるつもりで手はじめに取り出したもので、まだ他のがどっさりとわたしの紙挟みにしまってあり、つづいてお目にかけることもできるのである。

だがそれには条件がある。それは人に知られずにすむということだ。というのは、たまたまわたしの名前がわかってしまえば、その瞬間にわたしは沈黙する。わたしは一人の婦人を知っているが、この人はちゃんと歩けるのだが人に見られるとたちまち跛[びっこ]を引く。作品の欠点だけでたくさんだ、その上何を好んでわたし自身の欠点まで批評にさらすことがあろうか。わたしが誰であるか解ってしまえば、こういわれるだろう。「あの人の本はあの人の性格と調和しない。何かもっとましな事に時間を使うべきだろう。謹厳な人間にふさわしからぬことだ。」批評家はけっしてこの種の悪口にこと欠かない。なぜかというと、こんな悪口はたいして頭をつかわなくてもいえるからである。

この作品で手紙を書くペルシャ人たちはわたしと一緒に住んでいた。われわれは生活を共にすごしたのである。かれらはわたしを別の世界の人間とみなしていたから、わたしに何も隠さなかった。実際、あんな遠方から移住した人たちにはもはや秘密をもちえなかったのである。かれらは私に、かれらの手紙の大部分を見せてくれた、そしてわたしはそれらを写し取った。そのいくつかはわたしがむりやりに引ったくったのだが、かれらとしてはその中味をわたしに知られないようにしたかったであろう。それほどそれらの手紙はペルシャ人のみえと気づかいにとって屈辱的なものなのであった。

わたしは翻訳者の役割をはたすにすぎない。わたしの骨を折ったことといっては、この作品をわれらの習俗にあうようにすることだけであった。わたしのできる限り読者にアジア語の負担を軽くさせ、際限のないもったいぶった表現から読者を救った。さもなくば読者は極度に退屈したことであろう。

だがわたしの読者のために行なったことはこれに止まらない。わたしは長たらしい挨拶[あいさつ]の言葉をけずり取ってしまった。東洋人はわれわれに劣らず挨拶の浪費家なのである。また、昼間の光線に耐えるには大変な苦労がいり、二人の友人のあいだではかならず死滅するはずの無数のくどくどした文句を切ってしまった。

書簡集を発表した人たちの大部分が、もしもこれと同じようにしたとするならば、かれらはかれらの作品が消えてなくなるのを見たであろ

うに。

ここに一つ、わたしをしばしば驚かせたことがある。それは、これらのペルシャ人が時にはわたし自身と同じくらいフランスの習俗や生活様式に通じており、それらのきわめて微妙な場合も心得ていて、わが国に旅行した多くのドイツ人はたしかに気づかなかった事柄に気づいているほどだということである。わたしはその原因をかれらのなした長期の滞在に帰する。これには、アジア人が一年かけてフランス人の習俗に通じるほうがフランス人が四年かかってアジア人のそれに通じるよりも容易であることは計算に入れてない。その理由は、前者が気心を打ち明けないのと同じくらい後者が明けっぱなしだからだ。

どんな翻訳者にも、一番不正確な注釈者にさえも、その訳文や解説の巻頭を原作の讃辞で飾り、その効用、長所、優秀をほめ上げることが習慣によって許されている。わたしはそれをまったくやらなかった。その理由はわけなく解るであろう。一番よい理由の一つは、序文というそれ自体すでにきわめて退屈な場所にこれを置けば、さぞかし退屈なものとなるだろうということである。

手紙の一

ユスベクからその友ルュスタンへ

イスパハンあて[1]

コム[2]には一日滞在しただけだった。十二人の使徒を生みなさった聖処女[3]の墓にお参りをすますや、ふたたび道を急いで、イスパハンを出てから二十五日目の昨日、わたしたちはタウリス[4]に着いた。

リカとわたしとはペルシャ人のうちではおそらくはじめて、知識欲のため国を飛び出し、静かな生活の楽しさを捨てて、労苦をいとわず叡知を求めに出かけた者といえるであろう。

わたしたちは栄えている王国に生まれたが、この国の境界がすなわちわれわれの知識の境界であるとか、東方の光だけがわれわれを開明するとか信じたことはない。

わたしたちの旅行がどんな噂の種になっているかを一筆知らせてくれ。わたしをだまそうとしてもだめだ、わたしは大勢の称讃者をあてにしてはいないのだ。手紙はエルゼロン[5]あてに出してくれ。ここにしばらく滞在の予定だ。

さよなら、ルュスタン君、この世のどこにわたしがいようとも、君には忠実な一人の友があると信じてくれ。

一七一一年、サファール月[6](二月)の十五日、

タウリスより

(1) ペルシャ人の手紙が出版された年にはペルシャ(イラン)の首府であったが、その翌年一七二二年、アフガン族に劫掠されたので、その後はテヘランが首府となった。

(2) コムまたはクーム。アナバル河沿岸のペルシャの都会。シート派の霊場。

(3) ファトメ。ムウサ・エル・カシムの娘。彼はマホメットの女婿ハリの六代目の継承者だとペルシャ人は認めている。

(4) アゼルバイジャン州の首邑。

(5) トルコ領アルメニヤの首邑。

(6) 回教暦は陰暦で、三五四日よりなる。サファールはその二月に当たる。

手紙の二

ユスベクから黒人去勢奴の長へ

イスパハンのハーレムあて

お前はペルシャ切っての美女たちの忠実な番人だ、わたしはお前にわたしがこの世にもっているもっとも大切なものを預けた。お前の手の中にはわたしのためにだけ開かれる宿命の扉の鍵がにぎられている。お前がわたしの心のこの貴重な預り物を見張っている限り、それは休まり、十分に安堵していられる。お前は静かな夜も、ざわめく昼も見張りをする。お前の疲れを知らぬ心遣いこそ、美徳のよろめくとき、それの支えとなるのだ。もしお前の番をしている女たちがその義務から脱しようとするならば、お前はそうした望みを失わせるであろう。お前は悪徳に対する降魔の利剣、貞節の大黒柱だ。

お前は女たちに指揮し、また服従する。かの女たちのあらゆる意志を盲目的に執行し、またかの女たちにも同様に後宮の掟を守らせる。お前はかの女らにもっとも下等な用事をしてやることに光栄を見出す。かの女らの正当な命令には敬意と畏れとをもって服従する。お前はかの女らの奴隷たちの奴隷であるかのようにかの女たちに仕える。しかしお前が貞潔と慎しみの法がゆるんだと感ずる場合には、支配権の転変によって、お前はわたし自身であるかのごとく主人として指揮する。

お前がわたしの奴隷どもの末席にいた時、ゼロからお前を引き上げて、お前をこの地位につけてやり、わたしの心の無上の楽しみをお前にあずけたことを、片時たりとも忘れるな。わたしの愛を分ち合う女どものそばに出てはうやうやしくへりくだれ。だが同時に女たちにかの女たちの非常な従属を感じさせよ。罪のないあらゆる快楽を与えてやれ。かの女たちのもそもそした気持をまぎらわしてやれ。音楽、舞踊、うまい飲物でかの女たちをなぐさめよ。かの女たちに勧めてしばしば集りを開かせよ。田舎へ行きたいといえば、連れて行ってやるがよい。しかしかの女たちの眼の前に現われる男どもは皆殺しにさせよ。身体を清潔にするように勧めよ、それは魂の清浄の鏡である。ときどきわたしの噂をきかせてやれ。かの女たちが色を競うその楽しい場所に、会いに行けたらばと思うのだが。

さよなら。

一七一一年、サファール月の十八日、

タウリスより

手紙の三

ザシからユスベクへ

タウリスあて

わたくしたちは去勢奴の長に申しつけて、田舎に案内させました。途中何事も起こらなかったとあれから話がございましょう。川を渡り、かごを降りねばならなかった時、ならわしにしたがって輿に乗りました。二人のドレイがわたしたちを肩にかついで運びましたが、誰の目にも触れませんでした。

いとしいユスベクよ、イスパハンのあなたの後宮では、どうしてわたしが生きてゆけたでしょうか？　絶え間なく過ぎ去った楽しみを思い出させ、毎日くりかえし劇しい力で欲望をかきまわしていたあの場所で。あそこではわたしは館から館へとさまよい歩き、あなたの姿を絶えず求めては、あなたには少しも会えず、どこへ行っても過ぎ去ったわたしの幸福の残酷な思い出にめぐり会うばかりでした。ある時は、生まれてはじめてあなたを腕に抱きしめたあの場所に、またある時は、あなたの妻たちのあの大げんかをお裁きになった場所に、自分がいるのではないかと思いました。わたしたちの誰もが自分をほかの人たちよりも美しさにまさっていると主張しました。わたしたちは想像力の許す限りのありとあらゆる粧い、飾りを尽してから、あなたの前に現われました。あなたは人工の粋が生んだ奇蹟を喜んでごらんになりました。あなたに好かれたい熱情がどこまでわたしたちを連れてゆくものかを知って、感心なさいました。しかし間もなくこうした借り物の魔力を、もっと自然な魅力に屈服させ、わたしたちの作り物を全部おこわしになったのです。いまではあなたに邪魔物になった飾り物を脱ぎすてねばなりませんでした。自然の簡素のうちにあなたの目の前に出てこなければなりませんでした。わたしは恥も外聞も忘れて、わたしの光栄だけを考えました。しあわせなユスベクよ、なんと多くの艶姿が、お目の前にくりひろげられたことでしょう！　わたしたちはあなたが長いあいだ、夢からうつつへとさまようのを見ました。ふらふらしたあなたの魂はなかなか止まるところを知りませんでした。それぞれの違った艶姿があなたに貢物を求めました。わたしたちはいずれもたちまちあなたの接吻で埋もれました。あなたはその物好きな視線を一番大事な隠し場所へ移しました。あなたは僅かのあいだにわたしたちに数かぎりない姿態をとらせました、たえず新たなご命令に、たえず新たな服従。打ち明けて申しますと、ユスベクよ、功名心よりももっと烈しいある情熱があなたに気に入りたいとわたしに願わせたのでした。知らぬ間にあなたの心をとらえたのです。それであなたは、わたし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

をつかまえ、離れ、またわたしのところへ戻り、ついにわたしはあなたを引き止めることができました。だから、勝利はまったくわたしのもの、失望はまったく恋敵たちのものでした。わたしたちはこの世で二人きりのような気になっていました。だからわたしたちのまわりに何がいようと気にもとめませんでした。あなたからわたしがうけた恋のあらゆるしるしをじっくり見ていられるだけの勇気が恋敵たちにあればよかったですのに。あの人たちがわたしのよがり方をよく見たとするならば、わたしの恋とあの人たちのとの違いに気がついたことでしょう、わたしと艶を競うことはできても、感受性を競うことはできないことが解ったでしょうに。……

だが、今のわたしはどうでしょうか。どこへわたしを、このはかない物語が連れていくのでしょう。愛されぬということは不幸です、だが、もう愛されぬということは恥辱です。わたしたちを捨てて、ユスベクよ、あなたは野蛮な国々を飛びまわっています。あなたという人は愛される幸せを何とも思っていないのね。ああ、あなたは何をなくしているか知りもしないのよ。わたしの口から出るものは溜息ばかり、だのにあなたには聞こえない。涙は果なく流れてもあなたの許には行かないのです。恋の炎が後宮で燃えさかるようなのに、あなたの無関心があなたをどんどんそこから引き離しています。ああ、わたしのいとしいユスベク、幸せになる術をあなたが知っていればなあ！　と思うばかりです。

一七一一年、マハラム月（一月）の二十一日、
ファトメのハーレムにて

手紙の四

ゼフィからユスベクへ

エルゼロンあて

とうとうあの黒い怪物は、わたしを絶望させようと決心しました。あれはわたしから奴隷のゼリードを是非とも離そうとしているのです。非常に優しくわたしに仕え、器用な手でどこにでも光彩と魅力をつけてくれるゼリードを。この別れが辛いだけでは、あれには物足りないのです、だから、それが不名誉になることをも願っているのです。この裏切者はわたしの信頼の動機を罪のあるものと見なそうと思っています、それに、いつもわたしに扉の後に追い払われて退屈するものですから、わたしには想像さえもつかないことを見たとか聞いたとかずうずうしい推量を立てているのです。なんてわたしは不幸なのでしょう！　こんなにとじこもって暮らしていたことも、堅く操を守っていたことも、あれの馬鹿げた嫌疑をはらしてはくれますまい。一人の卑しい奴隷があなたの心の法廷にわたしを訴え出て、あなたの心にわたしが申し開きをしなければならないとは！　いいえ、いやです。わたしの自尊心は無実の証を立てるほどまで身を落すことをわたしに許しません。わたしの行いには、あなた自身、あなたの愛、わたしの愛と、強いて申し上げなければいけないのなら、いとしいユスベクよ、わたしの涙のほかに保証人を立てたいとは思いません。

一七一一年、マハラム月の二十九日、
ファトメのハーレムより

手紙の五

ルユスタンからユスベクへ

エルゼロンあて

君はイスパハンのあらゆる会話の主題となっている。噂は君の出発でもち切りだ。ある人々はそれを軽佻な気性に帰し、またほかの人々はなにかの悲しみのせいにしている。君の友人だけが君を弁護しているのだが、誰一人納得させることができない。君が君の夫人たち、両親、友人、祖国を捨てて、ペルシャ人の知らない国へ行けるということが人々に理解できないのだ。リカの母親をなぐさめる手はない。かの女は君に倅を返せ、君がかの女から倅を奪ったのだと言っている。わたしとしては、ユスベク君、本来わたしは君のすることなら何でも賛成したくなるのだが、君の不在は許すことができない、だから、君がわたしに対しどのような理由をならべ立てようとも、わたしの心はそれをけっして認めはしないだろう。

さよなら、いつまでもわたしを愛してくれ。

一七一一年、初めのレビアブ月（三月）の二十八日、
イスパハンより

手紙の六

ユスベクからその友ネシールへ

イスパハンあて

エリヴァンから一日行程で、われわれはペルシャを離れてトルコの属領に入った。十二日の後に、われわれはエルゼロンに到着したが、ここに三、四カ月滞在の予定だ。

君に打ち明けなければならないことは、ネシールよ、ペルシャの姿を見失い、裏切者のトルコ人[1]のあいだに自分がいるのを見出した時、人には言えない苦痛を感じた。この不敬漢どもの土地に入って行くにつれて、わたし自身も不敬漢になる感じがした。

わたしの祖国、家族、友人たちがわたしの頭に浮かんだ。わたしの愛情が目覚めた。ある一つの不安がわたしをすっかり動揺させてしまい、わたしがあまり多くを企てたので休息できないのだとわたしに知らせた。

だが、わたしの胸をもっとも痛めているものは、わたしの女たちだ。かの女たちのことを思うと心配に責めさいなまれずにはいられない。

それは、ネシールよ、わたしがかの女たちを愛しているからではない。この点については、情欲の余地を残さない一種の無関心状態にわたしはあるのだ。わたしが暮らしていた大世帯の後宮ではわたしは情事を避け、情事によって情事を破壊した。だが、わたしの冷淡そのものから人に言えぬ嫉妬が生じ、それがわたしを責めさいなんでいるのだ。一群の女たちがほとんど自分勝手にさせてもらっている。それなのに、かの女たちについて、わたしに対し責任を負うべき者としては、卑劣な奴らしかいないのだ。かりにわたしの奴隷たちが忠実であるとしたところで、なかなか安心しがたいだろう。かれらはそうでないのだから、どうなることか。わたしがこれから歩きまわろうとする遠い国々に、どんないやな便りがやって来ることになるのか。これはわたしの友人たちでも投薬できない病気なのだ。これはかれらもその不愉快な秘密を知らないはずの場所なのだ。それに、かれらとても、何の役にたちえようか。それというのが、人の目をそばだたせるような懲戒よりも、世間に知れない見逃しのほうを千倍もましだと思うだろうではないか。わたしの悩みのすべてを君の心にあずけるよ、ネシール君。これが今の状態ではわたしに残されたただ一つの慰めなのだ。

一七一一年、次のレビアブ月（四月）十日、
エルゼロンより

（1）ペルシャ人はマホメットの女婿（じょせい）パリの宗徒であるが、トルコ人はアブ・ベクル宗徒である。

手紙の七

ファトメからユスベクへ

エルゼロンあて

あなたが出発してから二月になるのに、わたしのなつかしいユスベクよ、がっくり気落ちがして、いまだにわたしにはそれが本当とは思えないのです。まるであなたがいらっしゃるかのように、わたしは後宮じゅうを歩きまわるのですが、少しも迷いが醒（さ）めません。あなたはあなたを愛している女性がどうなることを望んでいらっしゃるのですか。あなたをいつもその腕に抱いていた女性、あなたに愛情の証を与える仕事しかしていなかった、その優れた出生によっては自由な、ただ、その愛の劇（はげ）しさによっては奴隷である一人の女性が？

わたしがあなたと結婚しました時、わたしの眼はまだ男性を見たことがありませんでした、いまでもわたしの眼が見ることを許されているただ一人の方があなたです。[1]というのは、わたしは男性の中にあのぞっとするような去勢奴はいれておりません、あの連中の一番軽い欠点が男性でないことなのですから。あなたの顔立の美しさとあの連中の不恰好なそれと比べるとき、わたしは自分を幸せだと思わずにはいられません。わたしの想像力はあなたの姿のうっとりさせるような魅力以上に素晴らしい観念をわたし

に与えはしないのです。誓って申し上げます、ユスベクよ、わたしの身分上やむなく閉じこめられているこの場所から、たとえ出ることが許されようとも、わたしを取り巻く警護から逃げだすことができようとも、世界の都イスパハンに住むありとあらゆる男の中から、選ぶことが許されようとも、ユスベクよ、誓って申し上げます、わたしはあなたのほかには選びません。この世の中に愛される値打のあるものはあなたのほかにはありえません。

あなたの不在が、あなたにとって大切な女の身だしなみをわたしにおろそかにさせたとは考えないで下さい。わたしは誰の眼にもふれてはならないのですけれど、また、肌身につける装飾があなたの幸福に役だちはしないのですけれど、それでもわたしは夫を喜ばす道を忘れないように努めております。一番心持よい香水で身をかぐわせないうちは床に入りません。わたしはあなたがわたしの腕の中に来られたあの幸せな頃を思い出します。すると、人をだます夢が、わたしを誘い、わたしの愛のなつかしい対象をわたしに見せるのです。わたしの想像力はその欲情の中に迷います、その期待の中で得意になるように。時には、辛い旅行にいや気がさしてあなたがまもなくわたしたちのところへ戻って来るかと思う、夜は覚醒にも眠りにも入らない夢のうちに過ぎます、わたしはわが身のわきにあなたをさがし、あなたがわたしの手から逃げて行くような気がします。しまいに、わたしを責めさいなんでいる炎そのものがこれらの夢を一掃し、わたしをわれに戻すのです。その時のわたしは非常に興奮していて……

こういってもあなたは信じないでしょうね、ユスベク。こんな状態で暮らすことは不可能です。炎がわたしの血管をかけめぐっています。わたしがこんなにはっきりと感じていることをどうしてあなたに説明できないのでしょうか！あなたに説明できないことをどうしてこんなによく感じるのでしょうか！　今でしたら、ユスベク、あなたの口づけのただ一つとこの世の支配とを取りかえっこするでしょうに。こんな劇しい情欲を持つと女は何と不幸なのでしょう、それを満たしてくれるただ一人の人がいないというのに。誰に頼るよすがもなく、気をまぎらしてくれる物もなく、溜息の日常とつのる情熱の嵐の中に暮らさねばならぬというのに。幸福になるどころか、他の男の幸福に役だつ幸福さえも持たぬというのに。後宮の無益な飾り物、夫の幸福のためにではなく、面子のためにしまってある！

あなた方は非常に残酷です、あなた方男性は！　あなた方はわたしたちが満たすことのできない情熱をもつのを喜んでいます。あなた方はわたしたちがまるで性に無関心であるかのように取り扱っていますが、本当に不感だったら、さぞかし怒ることでしょうに。非常に長く禁欲すれば、わたくしたちの情欲はあなた方を見て燃えつのるだろうとあなた方は考えていらっしゃいます。愛されるということは骨の折れるものです。あなた方の値打によってあなた方が手に入れるだけの勇気のないものを、わたしたちの感覚の不満から手に入れるほうがより簡単です。

さようなら、わたしのなつかしいユスベク、さようなら。あなたを熱愛するためにだけ、わたしは生きていると思って下さい。わたしの魂はあなたでいっぱいになっています。それであなたの不在はあなたを忘れさせるどころか、わたしの恋をつのらせるでしょう、たとえそれが荒々しいものになるとしても。

一七一一年、初めのレビアブ月の十二日、
イスパハンのハーレムより

(1) ペルシャの婦人はトルコの婦人やインドの婦人よりも、はるかに厳重に監視されている。〔原注〕

手紙の八

ユスベクからその友ルュスタンへ
イスパハンあて

君の手紙をエルゼロンで受け取った、わたしは今そこにいる。わたしの出発が大評判になるだろうとは、かねがね考えていたが、少しも意に介したことはない。君はわたしが何にしたがうべきだと思っているかね、わたしの敵どもの深謀にか、それともわたしのそれにか。

わたしはまだ年端のゆかぬ頃から宮廷に出仕した。が、断言できることは、わたしの心はそこで少しも腐敗しなかった。いや、ある大きな計画を立てさえもした。すなわち、そこであえて有徳であろうとした。悪徳に接するとすぐに、わたしはそれから遠ざかった。だが次にはそれに近寄って仮面を引きはいだ。わたしは真実を玉座の下にも持ち込んだ。そこでわたしはその時まで知られていない言葉を使った。わたしはおべっかに度を失わさせた。それでわたしは偶像崇拝者たちと偶像とに同時に雷撃を加えたのである。

だがわたしの信実がわたしに敵を作り、大臣たちの警戒心を招くのみで、君主の恩恵が得られず、腐敗した宮廷でわたしを支えているものはもはや微力な徳性だけだと知った時、わたしは宮廷を去ろうと決心した。わたしは学問に対する大きな愛着をよそおったところ、よそおいつづけた結果は、愛着が本物になった。もはやどんな問題にも関係しないで、田舎の別荘に引っ込んだ。だが、このやり方にも不都合な点があった。わたしは相変らず敵どもの悪意にさらされていたのだが、それから身を守る手だてをほとんど失っていたのである。ひそかに与えられた二、三の忠告がわたしに真剣に自分の身のことを考えさせた。わたしは故国から亡命しようと決意した、すると宮廷からの引退そのものがそのもっともらしい口実を提供してくれた。わたしは国王の下に出かけ、西洋の学問を研究したいわたしの望みを明らかにし、陛下はわたしの旅行から利益を得たもうこともあろうと、うまく吹き込んだ。わたしは陛下のお許しを得て出発し、敵どもの手から犠牲者を一人救ったのだ。

これが、ルュスタンよ、わたしの旅行の本当の動機だ。イスパハンには勝手に噂を流させておけ。わたしを愛している人々の前でなければわたしを弁護しないでくれ。わたしの敵どもにその悪意のある解釈をさせておけ。これが奴らのわたしになしうるただ一つの悪だとすれば、こんな有難いことはない。

今こそ世間はわたしの噂をしている。だがおそらくそのうちわたしはまったく忘れられ、友達さえもおそらく……いいや、ルュスタン、わたしはこんな不愉快な考えに身を委せたくない。いつまでもわたしは友達に愛されるであろう。君の変らぬ友情をあてにしているように、わたしは彼らの友情もあてにしているのだ。

一七一一年、初めのジェンマディ月
(五月)の二十日、エルゼロンから

手紙の九

去勢奴の長からイビへ　　エルゼロンあて

お前は昔からの主人に随って旅行をしており、州や国々を廻り歩いている。煩いに心を痛めるひまもあるまい。毎瞬が新たな事柄をお前に見せ、見るものすべては心を楽しませ、時の移るのも感じさせない。

わたしはそれとは事かわり、恐ろしい牢獄に閉じこめられ、いつも同じ対象に取り巻かれ、同じ煩いにむしばまれている。五十年の心遣いと不安の重荷にたえかね、わたしはうめく、しかも長い生涯のうちに一日の晴れやかな日、一瞬ののどかな隙を持ったとは言いえないのだ。

わたしのはじめの主人がその女たちをわたしに委せるという残酷な企画を抱き、数知れぬ脅迫に支えられた勧誘によって、永久にわたし自身と別れることを余儀なくさせるや否や、極めて骨の折れる仕事にあきあきしていたのでわたしは、自分の情欲を犠牲にして、休息と幸福を得ようと考えた。なんとわたしは不幸だったろう！　上の空になっていたわたしの精神は埋合せをわたしに見せてはいたが、損失を見せなかった。わたしは恋を満たすことの不能によって、恋の攻撃から解放されるであろうと望んでいた。ああ！　人がわたしの中に消し去ったのは情欲の結果であって、その原因は消さなかったのである、だから、その悩みが軽減されるどころか、それを絶えず掻き立てる事物に取り囲まれることになった。わたしはハーレムに入ったが、そこにはあらゆるものがわたしの失った物に対する愛惜の情をかき立てるのであった。わたしはいつも興奮していた。数知れぬ天成の美がわたしの眼の前で裸になるのはわたしを落胆させる

ためにすぎないように思われた。あくまでも不幸なことには、わたしはいつも一人の幸福な男性の姿を眼にしているのであった。この心の乱れていた時代には、女を主人の寝床に導き、着物を脱がせた時には、胸は煮えくり返り、魂には激しい絶望を抱かずには自分の部屋に戻ったことはなかった。

このようにしてわたしのみじめな青春は過ぎた。打明け話の相手は自分だけであった。苦労と煩いを負わされながら、それにじっと耐えるよりほかはなかった。情をこめた眼でながめたい心をそそられる女たち、その女たちをけわしい眼つきで見つめるのであった。もしもかの女たちがわたしの心を見透していたとすれば、わたしの身は破滅していたであろうに。そして彼女たちはこれをどんなにうまく利用したことであろうに。

思い出すことだが、ある日のこと、わたしは一人の女を風呂に入れていたのだが、興奮のあまりまったく理性を失い、恐るべきある箇所に自分の手を持っていってしまった。我に返ってまず思ったことは、この日がわたしの命の最後の日だということであった。しかし運よくもわたしは万死に値する罰をまぬかれた。だがわたしの弱点を知られてしまったこの美人は、かの女の沈黙を高価に売りつけた。わたしは完全にかの女に対する権威を失い、それからというものは、いやおうなしにかの女には寛容に振舞わせられ、そのため千度も生命を失う危険にさらされた。

ついに青春の炎は消え去った。わたしは年を取り、この点では平静な状態に入っている。わたしは無関心に女たちを眺め、こいつらがわたしに忍ばせてきたあらゆる軽蔑、あらゆる苦悩を十分に返礼している。わたしはこいつらを指揮するために生まれたのだということをわたしはいつでも忘れない。それでかの女らを今だに指揮する折には自分が男性に戻ったような気がするのだ。わたしがかの女たちを冷静に考察し、わたしの理性がかの女らのあらゆる弱点を見えるようにしてからは、わたしはかの女らを憎んでいる。他人のためにかの女らの番をしているとはいえ、人を服従させる快楽はわたしに秘かな歓喜を与える。かの女たちが欲しがるものを全部取り去る時には、それが自分のためにしているような気がするし、それによる間接的な満足がかならずわたしに戻ってくる。わたしのハーレムにおける存在は小帝国の君主みたいなもので、そのためわたしの野望、わたしに残されている唯一の情念も、多少は満たされるというものだ。万事わたしが中心になって行われ、いつでもわたしが必要だということを見てわたしは喜んでいる。わたしはこれらの女の憎悪を喜んで引き受ける。それがわたしの立場を強化しているのだ。だからかの女らは恩知らずを相手にしているのではない。かの女らのきわめて無邪気な快楽をも、先手を打って押える。わたしはかの女らにとって越え難い障壁だ。かの女らがいろいろと企んでも、ぴしゃりと止めさせてしまう。わたしは拒否で武装し、細心で逆毛を立てる。わたしの口から出る言葉は義務・美徳・貞節・慎しみばかりだ。わたしは女性の弱点と主人の権威を絶えずかの女らに語って絶望させる。その後で、わたしはこれほど厳格にしなければならぬことを嘆いて、それには、かの女ら自身の利益と、かの女らに対する非常に大きな愛情以外に動機がないことを理解させようと思っているようなふうをする。

そうはいうものの、わたしのほうでも数限りない不愉快な目にあい、毎日のようにこの復讐好きな女どもが、わたしがかの女らに与えるそれに輪をかけようとしているのではないということではない。かの女たちは恐るべき逆手打ちを食らわせる。われわれのあいだには支配と服従との潮の満干のようなものがある。かの女らはわたしにこれよりひどいものはないような恥さらしの仕事を押しつける。かの女らは比類のない軽蔑を好んで示し、わたしの年に免じるどころか、ごくつまらない用事のために夜中に十回もわたしを起こさせる。わたしは絶えず、指図・命令・仕事・気まぐれに疲れはてる。まるでかの女らが私を運動させるためにリレーをやり、その気まぐれが交代するかのようである。時としてはかの女たちは念には念を入れさせて楽しむ。偽の打明け話をやらせてみる。ある時は、若い男がこの家のまわりをうろついたとか、またある時は、物音が聞こえたとか、手紙の返

事を出したにちがいないとか、わたしに告げにやってくる。それはどれもわたしをまどわせる。しかもこの当惑をかの女らは笑の種にする、わたしがこんなふうに自分を苦しめるのがかの女らには嬉しいのだ。またある時には、わたしをかの女らの戸口のうしろに立たせたまま、夜昼となくそこに縛りつけてしまう。仮病を使い、気絶・恐怖をよそおうのがじつにうまい。こうして自分たちの思う壺にわたしをはめこむ口実に事を欠かない。こんな場合には盲目的な服従と、無制限な迎合とが必要である。わたしのような人間の口から出る拒絶の言葉は前代未聞のことであろうし、もしわたしが服従をためらえば、かの女らは当然わたしを処罰することができるのだ。こんな屈辱を受けるくらいなら、親愛なるイビよ、わたしは自分の命を捨てるほうがましだと思う。

それだけではない。わたしは一刻といえどもご主人様のお気に召していると確信することができないのだ。ご主人様の胸の中にはわたしを破滅させることしか考えていない敵が女どもの数ほどいるわけだ。かの女たちはわたしの言い分が絶対取り上げられることのない十五分間、何事も拒否されない十五分間、わたしがかならず悪いことになっている十五分間というものを持っている。わたしはご主人様の寝台へ、いらだっている女どもを連れて行く。こいつらがそこで、わたしのためを計ってくれるとか、わたしの立場が有利であろうとか、お前は考えるかね。かの女らの涙、その嘆息、その抱擁、その歓喜さえもがわたしの心配の種なのだ。かの女らは戦勝の場にいるのだ、かの女らの魅力がわたしには恐るべきものとなる。エロサーヴィスが一瞬にしてわたしの過去のサーヴィス全部を消し去り、もはや自分をなくしてしまったご主人様に対し保証となるものは何もないのだ。

あしたに君恩に泣き、夕べにはご不興をかこったことが何べんあったことか！　ハーレムをめぐってまったく理由もなく鞭打たれた日に、いったいわたしは何をしたというのか。わたしは一人の女をご主人の腕に委ねた。ご主人が炎え上がったのを見るや、かの女は涙の堰を切った。かの女は不平をぶちまけて、その不平をうまく手かげんして、相手の恋情がつのるにつれて増加させていった。このような危機にどうしてわたしが、自分の立場を主張しえたであろうか。わたしは一番予期していない時に、してやられた。わたしは恋の折衝と吐息が作成した条約の犠牲となったのである。これが、親愛なるイビよ、相も変らぬわたしの残酷な生活状態なのだ。

なんとお前は幸せなのだろう。お前の心遣いはユスベクの身のまわりに限られている。かれの気に入り、命の果てるまで君寵を受けることはお前にとって容易なことだ。

一七一一年、サファール月の末日、
イスパハンのハーレムから

手紙の一〇

ミズラからその友ユスベクへ

エルゼロンあて

君はリカの不在の埋合せのできる唯一の人であったし、君の不在を慰めうる者はリカあるのみだった。その君を今われわれはもっていないのだ、ユスベクよ。君はわれわれ仲間の魂であった。心と精神が作り上げた誓約を破るにはどれほど激しい力がいることであろう！

こちらではわれわれは大いに議論を戦わせている。われわれの議論は通常道徳が中心になる。昨日は人間は快楽と感覚器官の満足によって幸福になるのか、それとも、徳行の実践によってなるのかを問題にした。ぼくは何度も君が人間は有徳となるために生まれて来たのであり、正義は人間がその存在と同じくらいに本来具有しているものだというのを聞いた。どうか君がそういう意味を説明してほしい。

ぼくは博士どもと話をしたのだが、この連中はコーランの条節をひねくりまわしてぼくを絶望させるのだ。なぜといってぼくはこの連中に本当の信者として話しているのではなく、人間として、市民として、家長として話しているのであるからだ。

イスパハンより、一七一一年、サファール月の末日

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com